

チボリ闘争終結のつどい

2009年12月17日

県労会議・伊原

「チボリ」に反対する県民の会、チボリはいらない倉敷市民の会、チボリ訴訟弁護団は12月16日、サンピーチ OKAYAMA にて、チボリ終焉に伴い20年の闘いの労をねぎらう「チボリ闘争終結のつどい」を開きました。会には闘争のはじめから今日まで、運動を支えてきた各団体の役員をはじめ弁護団など41人が参加しました。冒頭に石村代表委員があいさつに立ち、「当初6人いた代表も今は自分ひとりとなった。1987年に始まったこの闘いは20年を経てついに廃園となった。裁判に負けたが闘いには勝利した。福武さんにはご苦労をおかけした。今後はこの運動を確信にしたい。こうゆう県の税金を無駄にするようなことがあってはならない」と語りました。カンパイの音頭を倉敷市民の会の江口さんは、「運動がスタートしたときは、当時の渡辺市長のもとで物が言えない雰囲気があった。だから、工夫して、山田洋二さんや井上ひさしさんなどのアピールを出した。その結果、市民は勇気づけられて頑張れた」と当時を懐かしく語りました。その後、チボリをなくそうと奮闘した方々のあいさつが続きました。運動の中心となって奮闘した福武さんは「今日はお世話になった人たちが集まっている。感謝しています。しかし、12月8日に武田県議が質問したチボリ決算報告で、その他27億円の内訳を説明できない知事や企画振興部長の言い訳は県の迷走を物語っている。詳細は知らない、返答しかねる、という言い分は普通の実感ではない。無責任な返答だった。県の上級幹部の責任を明確にしなければならない」と語り、「チボリは終わってない」と怒りを込め、情熱を注いだチボリ闘争の本質に迫るあいさつを行いました。また、弁護団を代表して、山崎弁護士は「16年間に6つの訴訟を行い、16の判決が出された。しかし、2勝14敗でこんなに負け続けた裁判はないし、自分の裁判でもこんなに負けたことはなく、チボリだけはカウントしないようにしている」と会場を沸かせました。その上で、チボリ闘争とは何であったのかを、豊臣秀吉の備中高松城の水攻めに例え、「チボリは総力戦だった。秀吉は足守川の水をせき止め、高松城を攻めたが、チボリの闘いは県民総ぐるみの闘いであった。そして市民は素手で闘い、財界はお金にものを言わせて強行した。高松城水攻めの中心人物は黒田官兵衛だったが、チボリは福武さんだ。結局、県民はチボリに行かず、チボリは最後に自滅した。振り返るとこの闘争は公共性を問う裁判だった」と説明しました。参加者からは「なるほど」という声も聞かれ、闘いを裁判闘争として支えた山崎弁護士の例え話に納得したようでした。武田県議や田畑岡山市議、岡山の操車場跡地にチボリ建設の話があった時に、真っ先に運動を始めた西学区の白石さんや倉敷の会の吉田さんなど、次々に思い出話が続きました。最後は田辺倉敷市議から閉会のあいさつがあり、「この運動は財界と県財政を食い物にする官僚との闘いであり、武田県議に質問にあるようにまだ続く」と締めくくりました。